

# 特集 東洋一の人造石油滝川工場



なぜ石炭から石油を造ろうとしたの？

石油資源に乏しい日本が本格的に燃料対策の調査・審議を始めたのは大正末期からで、以後、太平洋戦争に至る約20年間、液体燃料の確保に向けた政策が国の重要課題として展開されました。

特に、日中戦争から太平洋戦争に至る約4年間は、石油代用燃料工業の確立を目的として法整備が進み、液体燃料の50%を人造石油で賄おうとしました。そのため、人造石油工場は国内や旧満州など18か所に建設され、最盛期で年間約20万トンを生産していたと言われます。しかし、その生産量は、当時日本の年間石油需要量の6・8%に



▲左から2人目

渡邊四郎 社長

▼前列中央



皆さんは、人造石油滝川工場を知っていますか。かつて滝川に存在した巨大な化学工場、通称「人石」。多くの方は、この工場のイメージが湧かないかもしれませんが、当時東洋一とうたわれていました。それが滝川にあったなんて気になりませんか。

昨年、郷土館に保管されている当時の資料が、国立科学博物館が選定する重要科学技術史資料(未来技術遺産)に登録され、また、今年は滝川工場で石油が造られてから80年の節目に当たります。この機会に、滝川の大きな歴史の1ページを振り返ってみましょう。

すぎませんでした。

そして、人造石油を語るうえで忘れてはならないのが、二代目社長の渡邊四郎氏の存在です。

昭和10年当時、三井物産の石炭部長だった渡邊氏は、ドイツの雑誌でF T法工業化の記事を見つけ、真っ先に北海道の石炭を原料として人造石油を製造することが頭に浮かんだそうです。これにより、日本の国難打開はもちろん、北海道の開発に役立てると。そこでいち早くドイツに渡り、翌年にはF T法の技術導入権利を買い取ったのです。

また、工場建設に対し強い理念や情熱を持ち、さらに社員を慈しんだことから、「この人のもとにこそ、多くの人が集まった」と言われました。

## 滝川工場の概要

北海道人造石油株式会社滝川工場は、太平洋戦争前後に存在した化学工場です。昭和12年7月、日中戦争が勃発し、戦線の拡大につれ、石油資源の必要性が一層高まりました。資源の乏しい日本にとって、石油の自給自足は長期にわたる戦争政策の重要な課題であることから、国策として、石炭から石油を造る「人造石油」の製造に向けた動きが加速します。昭和13年7月、北海道長官より滝川が人造石油工場の適地に内定したとの通知を受けた滝川町長・神部為蔵は、迅速かつ極秘裏に地主と土地買収の交渉を行い、わずか2日間で広大な用地買収を成功させます。そうして現在の陸上自衛隊滝

- 工場敷地面積 158ヘクタール
- 従業員数 最盛期で2,000人以上  
※昭和19年当時の人員構成  
事務職213人、技術職959人  
(技術職内訳：大学卒15人、専門学校卒53人、旧制中等卒168人、男子工員723人)
- 勤務体制 24時間3交代制
- 工場施設・装置 原料ガス製造工場、石油合成装置、凝縮・分溜装置、イソオクタン製造工場、配合ディーゼル油工場
- 製造物 合成油のほか副産物としてベンゾール、ピッチ、クレオソート、ナフタリン、硫安、パラフィン、カーボンブラック

川駐屯地付近に、ドイツ人技師の指導のもと、工場や研究所、住宅等が昼夜を問わず建設され、滝川の市街は飛躍的に活気に満ちていきました。昭和16年6月、コークス炉の火入れが行われ、翌17年には人造石油の運転を開始、最初の産油に成功します。以来順調な操業を続けてきました。しかし、昭和20年8月15日の終戦によって、事業方針を根本的に変更しなければならず、同年10月、人造石油の生産を中止しました。なお、軍事機密のため詳細は明らかではありませんが、昭和17年の初出荷から、昭和20年の操業停止までに滝川工場で製造された人造石油は、約3万トンと推定されています。

## なぜ滝川に？

人造石油の第一工場が滝川に立地した経緯は明らかではありませんが、渡邊氏はのちに人造石油工場建設の立地条件として、次の3つを挙げました。

### ①原料である石炭の質および量に対する適応性

日本最大の炭田は、北部の空知炭田(赤平、芦別、砂川、歌志内、上砂川等)、南部の夕張炭田(幌内、夕張、真谷地、南大夕張等)からなる石狩炭田で、国内でも良質な原料炭が採れ、こうした産炭地に近接した滝川は立地的に適応していました。

### ②用水の質と量の問題

流域面積全国2位、長さ全国3位と、日本三大河川のうちの一つに数えられるほど豊かな水源である石狩川に面する滝川は、工業用水を確保するのに最適でした。

### ③候補地の交通運輸の利便性

滝川は、陸路と鉄路の要衝で

あり、資材の供給や産炭地からの石炭をはじめとする物資の輸送に高い利便性がありました。つまり、①③の条件検討の結果、滝川が選ばれたと考えられます。



## 終戦後、滝川工場はどうなったの？

終戦に伴い、軍需工場としての意義は失われ、GHQの命令により、人造石油の製造は中止しました。

昭和21年、平和産業に転換し、滝川化学工業株式会社として再出発します。培った技術を生かし、人造石油製造過程から生成された、コークスやコールター、ナフタリンなどの副産物を製品とする努力が続けられ、東洋高圧砂川工場へガスを送気するなどの事業も行いました。しかし、巨大な施設を民間企業として維持するには負担が大き過ぎたため、昭和27年6月、多額の赤字を残し倒産しました。

昭和		大正	
27年	21年	20年	14年
倒産	滝川化学工業株式会社設立再出発	GHQの命令により操業停止	法が特許申請される
		業開始、12月初出荷	ドイツでフィッシャー・トロプシュ(以下「FT」)法の特許申請される
		コークス炉に火入れ	三井鉱山の研究所でFT法の実験に成功
		人造石油合成への試運転操業開始	三井物産とルアー・ヘミ社間でFT法技術導入オプション契約が成立
		滝川研究所開設	工場地内定を受け神部町長が地主と買収交渉
		滝川工場建設が始まる	北海道人造石油株式会社設立